中之条ビエンナーレ2013参加企画

「こどもわーくしょっぷすくーる@ぐんだいびじゅつ」

催行：群馬大学教育学部美術教育講座(茂木一司＋郡司明子＋林耕史＋齋江貴志＋喜多村徹雄＋春原史寛＋学生・院生)

趣旨：私たちは、群馬県下の広義の美術教員（幼稚園・小学校・中学校・高校など）を育てることを通して、その裾野に広がる子どもたちのアート（美術教育）を支援してきました。この企画は、中之条ビエンナーレに含まれる吾妻地区の幼保小中高等学校の子どもたちを中心に、「アートにふれる・つくる・みる・かんがえる」ことを通して、「地域（コミュニティ）・アート・コミュニケーション」などの問題を総合的に考えてみようという企画です。

同時に、日本の山里・山間過疎地区（対象地区）に存在する共通の問題点をアートによってビジュアル化し、地域コミュニティの住人とシェアするために、子どもたちの創造力や想像性を活かして、世界中に発信し、同じ問題を抱える人々にわかりやすく表現していきたいと考えています。

アートは今作品というモノの世界から、コトをつくりだすプロジェクト型に変容しはじめています。プロジェクト型アートは、「参加する」ことによって成立する／しないという特色があります。人々は「参加」によって、世界を共有し、「自分の（居）場所」を得る。つまり、「世界は人々に共有されてはじめて存在する」ともいえます。

アートプロジェクトの中で、あるいはアートを通して、いろいろな学びが起こります。ふだんは見えない学びのプロセスを見えるようにし、ふりかえりによって共有し、更なる学びの深みを体験します。たとえば、ワークショップという学びはひとりでするのではなく、みんな（協同）ですることによって、お互いの「違ってもいいこと」を体験し、認め合い、からだ全体で学び、即興的に動き、時に「教える―学ぶ」関係さえも越境する、自分が納得する答えを探すエクスサイズです。私たちは、多くのしがらみの中でいわばがんじがらめになっています。特に学校化された社会の中で、子どもたちはその価値感を守り、おとなや社会に対していい子でいることを強いられています。このワークショップスクールの企画では、そんな子どもたちをアンラーンさせ、「学ぶことが楽しい」という、学びの原点に立ち戻すことを目的にしています。子どもたちがアートや文化を自分のこととしてとらえなおして発信できるような仕組みづくり「子どもによる子どものための芸術・文化発信プロジェクト」を企画します。

私たちは、「学びの楽しさ」を取り戻し、学びのわくわく感をもう一度味わいたい。そのために新しく４つのプログラムをつくりました。これらのワークショッププログラムによって、たくさんの子どもたちとアートや文化で関係性をつくり、組み替え、編み直し、そして多様な差異を発見し、認めあいながら、一つのかたちをつくっていきたいと思っています。いわゆる展覧会とは、ものとしての作品の展示評価を受ける場所ですが、展覧会にはもっと教育的な側面があります。学生は展覧会に参加することによって、人々がアートについて関心を持ち、語り、（自他を）広げていくこともまた、アートの行為であることをその場で学んでいきます。つまり、（アート等との）「出会い」「語り」「共有し（つむぎ合い）」「広げていく」のは、人であり、人と人と協同性の中にあるということです。

地域・社会やそこに住まう子どもたちのためにアートプロジェクトが拓かれるのならば、それはすでに（常に）教育的なものを内包するモノ・コト・場だと考えています。ご参加・ご支援のほど、よろしくお願いします。

■総括シンポジウム「子どもたちがコミュニティを再生する―アートにふれる・つくる・みる・かんがえることを通したアート・コミュニケーションから何を学んだか」

○日時：10月5日(土)13:00～16:00　場所：伊参スタジオ(申込不要)

「アートプロジェクト(AP)で子どもたちは何をどう学ぶことができるのか」。日本におけるAPばやりの状況の中で教育＝学習にフォーカスした取り組みはなぜ少ないのか？アートが社会化されるプロセスを楽しむのがAPの１つの側面ならば、もっと教育に光があたってもいいはずだ。千葉大のWican(神野)、ながの＆とがび(中平)など、教育に特化したAPも見られるが…。このシンポジウムでは、ムサビる！を実践する三澤氏と美術館の教育活動に携わる齋藤氏を交えて、群馬大学の中之条における具体的な取り組みに基づいて、アートプロジェクトにおける子どもの学びについて、みんなで考えてみたい。

三澤 一実(みさわ かずみ)（敬称略、以下同様）
武蔵野美術大学教職課程研究室教授
1963年長野県生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了。埼玉県の中学校教員及び埼玉県立近代美術館、文教大学教育学部専任講師を経て現職。専門は美術教育・鑑賞教育。2007・2009年「図画工作美術何でも展覧会」(うらわ美術館)。現在「旅するムサビ」を主宰し全国の小中学校高校に出向き鑑賞活動を中心としたワークショップなどを展開。著書に『美術教育の動向』『造形ワークショップの広がり』 など。

齊藤 佳代(さいとう かよ)
東京国立近代美術館　工芸課　研究補佐員
1971年生まれ。上智大学卒業、埼玉大学大学院満期退学（哲学専攻）。ギャラリーや企画会社等にて展覧会企画等を行った後、国立西洋美術館の教育普及室インターンを経て、2005年より現職。東京国立近代美術館工芸館で、鑑賞プログラムの企画運営及びガイドボランティアの育成等に携わる他、VTSに基づく対話を用いた美術鑑賞に関するファシリテータの実践、およびその考察や検証を行っている。

郡司 明子(ぐんじ あきこ)
群馬大学教育学部准教授
群馬県生まれ。横浜国立大学大学院教育学研究科修了。修士（教育学）。群馬県公立小学校、お茶の水女子大学附属小学校教諭を経て現職。身体性を重視するなかで衣食住に着目し、生活文化を味わい直す「アート」の活動をワークショップ等を通じて展開している。「からだ・きづき・対話のアート教育」をテーマに実践研究中。

春原 史寛(すのはら ふみひろ)
群馬大学教育学部准教授
1978年長野県生まれ。筑波大学大学院博士前期課程人間総合科学研究科芸術専攻修了。修士（芸術学）。大川美術館学芸員、山梨県立美術館学芸員（学芸担当・教育普及担当兼務）、山梨県立博物館学芸員を経て、現職。専門は日本近代美術史。担当展覧会「浅川伯教・巧兄弟の心と眼―朝鮮時代の美」展（山梨県立美術館ほか、2011年）ほか。

喜多村 徹雄(きたむら てつお)
群馬大学教育学部准教授
奈良県生まれ。金沢美術工芸大学大学院博士後期課程修了。博士（芸術）。2007年より現職。出来事の“状態”や“関係”を手掛かりに様々なメディアで創作活動を行っている。主な個展にTWS本郷、TWW都庁2004。グループショーに、中之条ビエンナーレ2011、The rising generation 8（渋川市美術館）、現代日本美術展ほか。

茂木 一司(もぎかずじ)【コーディネータ】
群馬大学教育学部教授
1956年群馬県生まれ。九州芸術工科大学大学院博士後期課程芸術工学研究科情報伝達専攻修了。博士（芸術工学）。鹿児島大学教育学部助教授を経て、現職。身体・メディア＋学習環境デザイン＋アートワークショップ＋障害児の表現教育に関心を持ち幅広く研究中。『協同と表現のワークショップ』（代表編集）、『ワークショップと学び2』(共著)、ほか。

中之条・近藤公園・伊参スタジオへの道順

沢渡・四万温泉をひかえた中之条町は山間の自然豊かな地域です。したがって交通は大変不便です。自家用車以外で来られる方は十分に事前に公共交通等を調べてお越しください。
近藤公園は中之条駅から歩ける距離ですが、伊参スタジオ(シンポジウム)はタクシーになります。
詳細はhttp://nakanojo-biennale.com/でご確認ください。

事前申込の方法と注意

「みる・きく・はなすウォークツアー」（全４回）とワークショップ２・３は、氏名・年齢・連絡先等を書いて、HP(http://moka7885.p2.bindsite.jp/w1docs/pg209.html) からお申し込みください。うまくいかない人は、メールでお願いします。メールの件名を「○○　参加申込」としてください。お申込み受付後、こちらから受信確認のメールを返信いたします。お申し込み後、平日５日を過ぎても受信確認のメールが届かない場合は、不着の可能性がありますので、電話・FAX にてご確認ください）
※注意：本ワークショップの様子は、予告・許諾なく、写真・ビデオ撮影・ストリーミング配信する可能性があります。写真・動画は、群馬大学教育学部美術教育講座（茂木一司・郡司明子等）が関与する Web サイト等の広報手段、講演資料、書籍等に用いられる場合があります。マスメディアによる取材に対して提供することがあります。参加に際しては、上記をご了承いただける方に限ります。